



## 写本『随筆集』と刊本『閑暇』がホッブズの著者ではないことの証明

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 清末, 尊大 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00003908">https://doi.org/10.32150/00003908</a>

## 写本『随筆集』と刊本『閑暇』が ホッブズの著作ではないことの証明

清 末 尊 大

イギリスのダービーシャー州チャツワースにある、キャヴェンディッシュ家の本家たるデヴォンシャー家の城の図書館に、『随筆集』という表題の、4折判78頁の写本がある。この写本は紋章を押し込んだ革で製本され、ウィリアム・キャヴェンディッシュ (W. Cavendish) が父親のデヴォンシャー伯 (My Lord) に宛てた手紙が献辞のようについており、元々はホッブズ文書には入っていなかったものだが、今日ではホッブズ文書の番号がつけられている (Chatsworth Hobbes Mss, D.3)。正確な表題と目次はこうである。『随筆集 1 傲慢, 2 野心, 3 虚飾, 4 悪口, 5 我意, 6 主人と召使, 7 出費, 8 訪問, 9 死, 10 歴史書を読むこと Essays 1 Of Arrogance 2 Of Ambition 3 Of Affectation 4 Of Detraction 5 Of Self-will 6 Of Masters and Servants 7 Of Expences 8 Of Visitations 9 Of Death 10 Of Reading of Histories.』この写本に最初に注目したのが、1930年代初めにホッブズ研究のためにここを訪れた著名な政治思想史学者レオ・シュトラウス (1899-1973) であり、彼はその図書館員フランシス・トンプソンとともにその写本研究にあたった。

シュトラウスがその写本に注目したのはこう考えたからである。ホッブズの政治学は自然科学に基づいていない、そればかりかむしろその逆で、1629年以後自然科学の研究に集中するのも政治学に対する関心からである。ならば、ホッブズの政治学は、その方法は別にして、その内容は自然科学に集中する1629年以前に形成されていなければならない。ならば、ホッブズの思想の理解には初期ホッブズの研究が決定的に重要である。ところが、初期ホッブズの研究にはトゥキディデスの翻訳の序文とアリストテレスの『弁論術』の2つの抜粋を除けば、ダービーシャー州のピーク地方の奇観を称えた詩や「第1原理に関する小論」、それに自伝、伝記、数通の手紙と役に立つ資料がほとんどない。そこでシュトラウスは初期ホッブズの研究に役立つ資料をチャツワースに探しに行き、先の写本を発見し、ホッブズの直筆だと判断し、初期ホッブズの決定的な証拠を手に入れたと信じた。

そこで出版しようとケンブリッジ大学出版部に持ち込み、出版されようとした時、運良く評議員の一人がその写本を一部として含む本が筆者不明の『閑暇』という表題で1620年にロンドンで出版者エドワード・ブラウントによって出版されていることに気付いた。正確な表題と目次はこうである。『閑暇、観察集と論説集。観察集 1 傲慢, 2 野心, 3 虚飾, 4 悪口, 5 我意, 6 主人と召使, 7 出費, 8 訪問, 9 死, 10 田園生活, 11 宗教, 12 歴史書を読むこと。論説集 1 タキトゥスの初歩, 2 ローマ, 3 へつらい批判, 4 法律 Horae Subsecivae, Observations and Discourses. Observations 1 Of Arrogance 2 Of Ambition 3 Of Affectation 4 Of Detraction 5 Of Self-will 6 Of Masters and Servants 7 Of Expences 8 Of Visitations 9 Of Death 10 Of a Country Life 11 Of Religion 12 Of Reading History. Discourses 1 Upon the Beginning of Tacitus 2 Of Rome 3 Against Flattery 4 Of Lawes.』観察集は随筆集 (Essays) とも言い換え

られている<sup>(1)</sup>。

シュトラウスは写本と刊本の関係を、分量の少ない写本が先で、草稿であり、写本を増補したのが刊本であると考え、両者の幾つかのテーマ〔写本で4つ、刊本で5つ〕がペーコンの第2版の『随想集 Essays』(1612年)からとられていることから、1612年から20年までの間に書かれたと断定した。そして、著者は、名目上、ホップズがその家庭教師兼執事であった2代目デヴォンシャー伯ウィリアム・キャヴェンディッシュ(1591-1628)だが、実質上ホップズだと断定した。その際、奇妙なことに、シュトラウスは写本、刊本ともそう断定しながら、当然宗教論や法律論が入っている刊本の方が重要なはずだが、写本の方を重視し、刊本の方は無視した<sup>(2)</sup>。

トンプソンは写本に押してある紋章を紋章院に照会した所、4代目デヴォンシャー伯ウィリアム・キャヴェンディッシュ(1641-1707)のものであるとする回答を得、遅すぎてシュトラウス説に合わないので当惑した。そこで前にずらす努力をし、初代デヴォンシャー伯ウィリアム・キャヴェンディッシュ(1552-1626)の妻の紋章が入っているので初代デヴォンシャー伯のものではなく、また2代目デヴォンシャー伯の紋章とは文言が違うので2代目デヴォンシャー伯のものでもないが、3代目デヴォンシャー伯ウィリアム・キャヴェンディッシュ(1617-84)の可能性があるとし、初代が死ぬ1626年から2代目が死ぬ1628年の間に書かれた可能性を示唆した。また、刊本の著者としては出版者のエドワード・ブラウント、初代デヴォンシャー伯の若死にした息子のギルバート・キャヴェンディッシュ、チャンドス卿グレイ・ブリッジズなどの名前が上げられていることが解った。しかし結論は混乱のはてにシュトラウス説に合わせ、実質上の著者はホップズで、名目上の著者が最初ギルバート・キャヴェンディッシュで、その死後弟の2代目デヴォンシャー伯に移った、と結論づけた<sup>(3)</sup>。

シュトラウス、トンプソンの後をうけてその写本を研究するのがフリードリッヒ・O・ウォルフであり、彼は1969年に写本を出版した<sup>(4)</sup>。その写本とホップズのものと思われる別の写本との専門家による筆跡鑑定、後のホップズの著作との親近性を付け加えたが、彼も基本的にシュトラウス説そのまま、名目上の著者が2代目デヴォンシャー伯で、実質上の著者がホップズだと結論づけた<sup>(5)</sup>。早稲田大学の藤原保信教授も1974年に同じ説を発表している<sup>(6)</sup>。今日ではこの説が通説で、大英博物館のブリティッシュ・ライブラリーのカタログでも、かの写本と刊本はホップズの著作の項目に入れられている。

それに対して、1978年に通説に重大な疑問を呈したのが、チャツワースにあるデヴォンシャー家の17世紀の蔵書目録を調べたジェイムズ・J・ハミルトンである。彼は証明はできないとしながらも、次の3点で疑問を呈した。第1に、写本の筆跡がホップズの筆跡ではないと判断できること。第2に、写本が刊本のコピーにすぎないと思えること。写本の献辞に「多くの人がこの種の仕事を銜学趣味と非難している」とあるのは刊本がそう非難されていたこと、従って写本より前に刊本があったことを示しているのではないか。また、写本の「歴史書を読むこと」に刊本の重要な最初の3頁分がないのは、刊本に書き加えられたのではなく、写本がコピーしなかったことを示すのではないか。第3に、1659年頃デヴォンシャー家の従者でホップズの秘書のジェイムズ・ウェルドンが作成した蔵書目録では『閑暇』が「キャヴェンディッシュ卿」の著作とされているが、1620年代末にホップズが作成した蔵書目録では『閑暇』が著者名なしに入れられ、ホップズが著者名を知らず、「キャヴェンディッシュ卿」に帰す考えもないこと<sup>(7)</sup>。

第1点と第3点も重要な指摘だが、通説を否定するには第2点を証明しなければならず、ハミルトンは残念ながらその証明ができていない。我々は独自にこの問題を検討しなければならない。

ホブズ (1588 – 1679) は大変な大器晩成型の思想家であり、1640年に最初の著作『法の原理』を書いた時でも既に50歳を越えていた。ホブズの伝記を書くとするれば、第1部の形成期に1588年からトゥキディデスのペロポネソス戦史の翻訳を出版する1629年までの42年を当てねばならず、古代ギリシア・ローマを研究し、特に古代ギリシア・ローマの歴史書から政治的教訓を学びとろうとしていたヒューマニストの時期である。シュトラウスは初期ホブズの資料が少ないことをほやいたが、今日ではもっと少なく、シュトラウスが使ったものも使えない。アリストテレスの『弁論術』の2つの抜粋訳の1つがホブズのものではないことが証明され、「第1原理に関する小論」の著者をホブズとすることにも重大な疑問が呈されている<sup>(8)</sup>。そこで写本『随筆集』、むしろどういふわけかシュトラウスの伝統が無視してきた刊本『閑暇』、特にその宗教論や法律論の重要性が増すわけで、私自身そう考えてその研究にとりかかった。しかし、残念ながら、ここで写本『随筆集』と刊本『閑暇』がホブズの著作ではないことを証明しなければならない。

先ず、写本を刊本と比較し、写本が刊本の抜粋コピーであることを証明しよう。写本は刊本の観察集あるいは随筆集の「1傲慢」から「9死」までと「12歴史書を読むこと」に対応し、その3分の2の分量であり、比較して最初に受ける印象からして写本が刊本の抜粋コピーであるということである。献辞のような手紙における銜学趣味批判と対応して、写本には刊本の古代ギリシア・ローマの作家からの引用は一切ない。段落、句読点、言葉はかなり違い、飛んだ箇所にはつなぎの言葉が入っているが、基本的に写本のすべてが刊本にある。唯一の例外は写本163頁の第2、第3段落だけである(写本の頁数はウォルフによって出版された本の頁数で示す)。写本が刊本からほとんど完全に再現できることは、写本が刊本の抜粋コピーだという印象を強く与える。また、写本はコピーに特有の誤りが多い。重複の誤りが多く(148頁14行目 must must, 158頁8行目 causes of causes of, 158頁21行目 that that)、誤りも多く(150頁2行目 take then [them], 150頁34行目 most [man] that, 154頁20行目 the [all] which, 159頁9行目 misery [miserias]... in all kindes, 160頁27行目 none of this [these], 163頁21–22行目 relation [narration]... they write)、誤りを刊本で正すことができる。刊本の誤りの訂正(156頁21行目 notion [motion])や刊本では正誤表で正されているのと同じ誤り(152頁12行目 he [they])もある。写本の誤りを刊本で訂正でき、写本が刊本の誤りを訂正したり、同じ誤りを繰り返していることは、写本が刊本の抜粋コピーだという印象を決定的にする。

更に、写本が刊本の抜粋コピーであることを証明するのが、写本にある刊本の写し誤りである。写本153頁20–21行目の文章は主語が欠落していること以外は刊本と同じであり、刊本を写す際に主語を写し忘れたのである(Such servants as → Such as)。写本154頁2行目の文章は小文字で始まっており、これは刊本のコロンをピリオドに変えたがために起こっている(:the first → the first)。写本165頁8行目の「彼ら」は、刊本の複数形の詩人達を単数形に変えたことを忘れ、刊本のまま写したことによる(the Poets ... they → the Poet ... they)。以上で写本が刊本の抜粋コピーであることを証明した。

次に、写本についている献辞のような手紙を検討し、写本の性格を決定しよう。その手紙の署名者ウィリアム・キャヴェンディッシュはウォルフが「下手な筆跡」と呼ぶ幼稚な字でサインの箇所だけを書いており、まだあまり字が書けず、mostをmosと幼稚語で書いても父親も家庭教師も変に思わない年齢であり、5、6歳であろう。また、その手紙は献辞ではなく、単なる父親のデヴォンシャー伯宛の手紙である(My Lordであって、To my Lordではない)。ウィリアム少年の家庭教師がこの抜粋コピーを作り、教育用のテキストとして使い、勉学の対象を父親の伯爵に報告する手紙をつけ、少年が署名したのであろう。何故写本が抜粋なのかもこれから明らかとなる。刊本では子供の教

育のテキストには長過ぎたからである。

最後に、写本の署名者ウィリアム・キャヴェンディッシュが具体的に誰で、いつ頃作成されたのかを決定しよう。この問題は先入観なしに正確に事実だけを見、全体を見渡しながら決定されなければならない。先入観さえなければ答えは簡単である。それは4代目デヴォンシャー伯ウィリアム・キャヴェンディッシュ(1641－1707)であり、1646年頃のことである。写本の紋章を4代目デヴォンシャー伯のものだと認定した紋章院の判定だけからもそれは明らかだったのである。写本が作成されたのは刊本が出版される1620年より後で、4代目デヴォンシャー伯が5、6歳の頃、従って1646年頃である。そして、ウェルドンが蔵書目録を作成した1659年頃には、写本をテキストに勉強しただけの「キャヴェンディッシュ卿」が写本の著者、更に刊本の著者とデヴォンシャー家の従者の中で誇張されていたのである。ホップズが1620年代末に蔵書目録を作成した際には刊本を著者不明としたのも、まだ写本が作成されておらず、デヴォンシャー家の者に結びつける糸ができていなかったからである。

以上で、写本『随筆集』は1620年に著者名なしに出版された『閑暇』という本の抜粋コピーにすぎず、1646年頃に4代目デヴォンシャー伯の教育用のテキストとして作成されたことを証明した。従って、写本『随筆集』は刊本『閑暇』の草稿ではありえず、刊本『閑暇』の著者をデヴォンシャー一家の者に結びつける糸は切れる。ホップズはデヴォンシャー家の図書館員も兼ねており、1620年頃にロンドンに行き、『閑暇』という本を図書館に買い求めただけで、あるいは読んだかもしれないが、『閑暇』の著者でもなければ、その抜粋コピーたる『随筆集』の作成にも関係しなかった。彼は2代目と3代目デヴォンシャー伯の家庭教師であったが、4代目デヴォンシャー伯の家庭教師ではなく—4代目デヴォンシャー伯の家庭教師の件で相談は受けているが<sup>(9)</sup>—、1646年頃にはパリに亡命し、デヴォンシャー家に仕えてもいなかった。よって、写本『随筆集』と刊本『閑暇』がホップズの著作ではないことが証明された。



## 注

- (1) Horae Subsecivae, London, 1620, To the Reader, pp. A 2 v, A 3.
- (2) Leo Strauss, The Political Philosophy of Hobbes, U. of Chicago P., 1936, 1984, pp. xii-xiii. 添谷・谷・飯島訳『ホッブズの政治学』みすず書房, 1990年, ix, x-xi頁.
- (3) Aus den Katalogentwürfen Francis Thompsons, in: F. O. Wolf, 'Hobbes' neue Wissenschaft, mit Hobbes' Essayes, Stuttgart, 1969, SS. 133-4.
- (4) Wolf, op. cit., SS. 135-67.
- (5) Wolf, op. cit., SS. 116-31.
- (6) 藤原保信『近代政治哲学の形成』早稲田大学出版会, 1974年, 323-32頁.
- (7) James J. Hamilton, Hobbes's Study and the Hardwick Library, Journal of the History of Philosophy, 16(1978), pp. 445-53.
- (8) 佐藤正志, 歴史における真理と修辭—初期ホッブズにおける方法の問題—, 渋谷編『啓蒙政治思想の形成』成文堂, 1984年, 67頁; 佐々木力, リヴァイアサン, あるいは機械論的自然像の政治哲学(上), 思想787(1990年1月), 72-3頁. Wilbur S. Howell, Logic and Rhetoric in England, 1500-1700, New York, 1961, p. 279; Richard Tuck, Hobbes and Descartes, in: G. Rogers and A. Ryan ed., Perspectives on Thomas Hobbes, Oxford, 1988, pp. 17-8.

それに代って初期ホッブズの研究にとって重要なのが、ウォルフもチャツワースの図書館にあることを指摘している初期のイタリア語の手紙である(Wolf, op. cit., S. 204 Anm. 569)。E・G・ジャコビによれば、それはホッブズと2代目デヴォンシャー伯が第1回大陸旅行(1610—15年)の際に知合ったヴェネツィアのフルジェンツィオ・ミカンツィオ(1570—1654)が2代目デヴォンシャー伯に宛てた手紙で、1615年から28年まで75通あり、ホッブズが英訳しており、ガブリエリという人による研究も既にある、と言う(E.G. Jacoby, Thomas Hobbes in Europe, Journal of European Studies, 4(1974), pp. 57-65; E.G. Jacoby ed., F. Tönnies, Studien zur Philosophie und Gesellschaftslehre im 17. Jahrhundert, Stuttgart, 1975, SS. 149 A., 176 A., 197 A., 205 A.)。ヴェネツィアのミカンツィオはパオロ・サルピ(1552—1623)の弟子で、教皇の政治への介入とイエズス会に反対する修道士であり、手紙は専らヨーロッパの国際政治をめぐる情報交換をやっているようだ。しかし、ミカンツィオはガリレオ(1564—1642)の親友である師匠同様、哲学や自然科学に関心を持ち、ベーコン(1561—1626)の称賛者にして自身ガリレオの親友であり、国際政治のことだけでなく、哲学や自然科学の話もしたのであろう。ホッブズが死の直前のベーコンに仕えたのも、主人の2代目デヴォンシャー伯の承認がなければできないことで、ミカンツィオの依頼によるかもしれない。(ホッブズはベーコンの著作のほとんどすべてをデヴォンシャー家の図書館に買い求めている。Hamilton, op. cit., pp. 449-50.) また、ホッブズは第1回大陸旅行の時からガリレオのことを知っていたはずだ。ガリレオは1592年以來パドヴァ大学教授であり、1609年に望遠鏡を発明してヴェネツィアの総督に献呈し、翌1610年には望遠鏡による天体観測の成果である『星界の報告』を出版してセンセーションを巻き起こし、トスカナ大公国首席数学家に任命され、フィレンツェに凱旋して去ったばかりであった。(ホッブズは『星界の報告』とケプラーが1611年の『屈折光学』で公表したケプラー宛のガリレオの手紙をデヴォンシャー家の図書館に買い求めている。Arrigo Pacchi, Una «Biblioteca Ideale» di Thomas Hobbes: Il MS E 2 dell'Archivio di Chatsworth, Acme, 21(1968), p. 36.) ホッブズは第2回大陸旅行(1629—30年)の際にはスペインとフランスのアントワープ継承戦争のためイタリア行きを断念せざるをえず(G.R. de Beer, Some Letters of Thomas Hobbes, Notes and Records of the Royal Society, 7(1950), pp. 195-206), 第3回大陸旅行(1634—36年)の1635年末に始めて『新科学対話』執筆中のガリレオに会えたが、既に第1回大陸旅行の時からガリレオのことを知っていたはずだ。

ホッブズの第1回大陸旅行に関して、もう1つ重要な点は、彼が1610年に渡ったフランスが反宗教改革に魅せられた狂信者ラヴァイヤックによるアンリ4世の暗殺によって震撼しており、フランスではこれからイギリスを襲う宗教戦争時代の政治思想が既に出揃っていたということである。武力抵抗権論、制限君主政論を展開するユグノーと過激派カトリックのモナルコマキ(暴君放伐論者)、不可分の立法主権論による絶対君主政論を展開するボダン、王権神授説による絶対君主政論を展開するポリテック派(拙著『ジャン・ボダンと危機の時代のフランス』木鐸社, 1990年参照)、ホッブズはこうした著作をデヴォンシャー家の図書館に買い求めている。特にホッブズが注目したのがボダン(1531—96)であり、彼はボダンのラテン語版の『国家論』を書き込みをしながら読み、『法の原理』で引用するだけでなく、『歴史方法論』や『国家論の弁護』、果ては『魔女論』までもデヴォンシャー家の図書館に買い求めている(Hamilton, op. cit., pp. 450, 451; Pacchi, op. cit. p. 34)。ホッブズは初期に大陸の思想家、特にボダンの影響を受

写本『随筆集』と刊本『閑暇』がホッブズの著作ではないことの証明

けており、その点を解明しなければならない。

- (9) Letter of Hobbes to S. Sorbière, St. Germain, 4 Oct. 1646, in: E.G.Jacoby ed., F. Tönnies, op. cit., SS.57-8; Letter of Hobbes to the 3rd Earl of Devonshire, St. Germain, 12 May 1648, cited in: Francis Bickley, The Cavendish Family, London, 1911, pp.58-9.

(本学教授・旭川分校)